

芸能・家庭科教育上の一問題点

佐 伯 正 一 ・ 中 野 満 男 ・ 金 田 ト シ 子

音楽、図工、職業家庭等の指導には、あらゆる教科がそうであるように、色々困難な問題がある。その中でもこの三教科に共通した問題の一つであるのは生徒がこれらの教科を重要な教科と思わないということであり、そのために学校でも家庭でも学習の真剣さが他の教科に比較すると薄いということである。こうした傾向をはっきりとらえてみよう。そしてさらにその原因をつきとめてみよう。それによって生徒の学習意欲の薄弱さを救うために打つ手が考えられたら、というわれわれの希望がこの調査を行う動機であった。

調査の対象は当中学校全生徒 308 名であった。

1. 生徒は重要さにおける教科の区別をどの程度考えているか

表 1

		中1	中2	中3	計	総計	%
区別がない	男	11	11	14	36	87	28
	女	15	16	20	51		
区別がある	男	40	43	32	115	210	69
	女	32	32	31	95		
わからない	男	2	1	4	7	11	3
	女	4	0	0	4		

a. 区別があると考えるものと、区別がないとするものとの比は、この調査では 7:3 位である。

b. 男子にくらべ女子が「区別がない」とするものがやゝ多いのではないか。

以上のことをこの表は語っているが、この区別があるとするものゝ凡ど全部が知的教科の方がより重要であると考えられるものであることは次の表が示すのである。

2. 生徒はどの教科が重要でないと思うか

この調査は全教科名をあげて大切と思う教科と大切でないと思われる教科にそれぞれ印を付させたもので、一人でいくつつけてもよいとしたも

のである。中には一つか二つしか印をつけないものもあるし、あるいは重要であるものゝ方で全教科に印をつけたものもあり、印の数は各人極めてまちまちであった。

表 2 A 大切と思われる学科

国	社	数	理	英	体	音	図	書	家	職
162	173	201	180	196	63	18	15	23	33	28
14.8%	15.8	18.4	16.5	17.9	5.8	1.7	1.4	2.1	3.0	2.6
平均 182					63		23.4			
68%					23.5		8%			

表 3 B 大切と思われない学科

国	社	数	理	英	体	音	図	書	家	職
10	7	1	2	6	76	131	148	130	119	84
1.4%	1.0	0.1	0.3	0.8	10.6	18.3	20.8	18.2	16.7	11.7
平均 5.2					76		122			
3%					37		60%			

この調査においても学年差や男女の差があまりない。たゞ家庭科だけは女子が重要とするものが多い。

さて、この数字を見ると、各教科の中で比率の高いものの群と、中位のものの群と、低いものの群との三つに明瞭に区別することが出来る。それで表 2、3 の中に点線によってこれを区劃し、平均とその百分率を記入してみたのである。

A の大切と思われる学科の方で比率の高いものはやはり知的教科の群で、中位が体育教科、低いものは芸能家庭科群である。そしてこの数字も A と B がうらおもてでほぼ符合している。

もっとも、こうした調査結果が得られることはその傾向に関する限り予想していたのであって、これから後の調査はこの予想にもとづいて企画し

て同時に行ったのである。

3. 生徒は芸能家庭科を知的教科及び体育教科との如何なる比重関係において考えているか

表 4

		中1	中2	中3	計	総計	%
①→②→③	男	12	10	10	32	42	13.6
	女	3	6	1	10		
①→②③	男	20	21	22	63	128	41.5
	女	21	19	25	65		
①②→③	男	10	17	9	36	48	15.6
	女	0	9	3	12		
①→③→②	男	3	1	2	6	23	7.4
	女	10	3	4	17		
①②③	男	8	6	7	21	65	21.1
	女	16	11	17	44		
わからない	男	0	0	2	2	3	0.8
	女	1	0	0	1		

この表は、図を簡明にするため、①とは知的教科をあらわし、②は体育教科、③は芸能家庭教科をあらわす。→印は矢の方向に向って重要さが減じ、記号の並列したものはその重要さが同程度であることをあらわす。

ただし、生徒に対する調査ではいちいちこの関係を文章で表現した。

この調査によってもやはり知的教科の重要視は強い傾向を示していて、①が2番目、又は3番目

にくる関係を考える者はなかった。最も多いのは①→②③の関係、つまり知的教科群が大切で、体育と芸能、家庭科群は相並んでより大切でないとするものである。

こゝでも学年の差は凡どなく、男女差では女子が多少芸能家庭科を重く見るのではないかと思われる。

さて、われわれの調査の重要な眼目は、生徒のこうした観念を形成するものは一体何であろうかということであった。これが次の調査である。

4. 芸能、家庭科は何故大切でないのか(表5) 知的教科は何故大切であるのか(表6)

この二つの調査は表裏両面から同じことがらを推して見ようというものであった。

表5のロ、表6のイは「何という理由もなく」「文句なしに」「とに角大切だ」「社会に出てから大切だ」等の意味をもった解答を含んでいる。そしてこの種の答えが表5で38%、表6で66%と断然高率であり、表5のイ、表6のロの、上級学校に入るためというのが予想に反し非常に低率であったことによってわれわれは少なからず気を暗

表 5

		中1	中2	中3	計	総計	%	
イ	①が受験科目として大切であるから ②又は③はぎせいにしてもよい	男	12	2	4	18	33	10.7
		女	6	6	3	15		
ロ	①は受験科目でなくても大切だから ②又は③はぎせいにしてもやる	男	16	33	24	73	118	38.3
		女	13	15	17	45		
ハ	③はなければなくてもよい	男	1	5	2	8	14	4.5
		女	1	2	3	6		
ニ	③は①と同じように大切だ	男	20	15	16	51	128	41.5
		女	29	23	25	77		
ホ	わからない	男	4	0	4	8	15	4.7
		女	2	2	3	7		

表 6

		中1	中2	中3	計	総計	%	
イ	特に大切だ	男	33	44	35	112	203	65.6
		女	33	31	27	91		
ロ	上級学校にはいるため	男	16	3	5	24	59	19.0
		女	15	9	11	35		
ハ	これだけやればよいといわれるので そう思っている	男	2	4	2	8	11	3.5
		女	2	0	1	3		
ニ	他の生徒に遅れると恥かしいので	男	1	0	2	3	11	3.5
		女	0	4	4	8		
ホ	余りやりたくない	男	0	3	1	4	9	2.9
		女	1	3	1	5		
ヘ	無記入		0	2	13	16	5.1	

くしたのである。

われわれは生徒が知的教科群を大切にすることを明らかに予想していた。そしてそれはこれらの教科の上達が入学試験で大きな働きをしこれ以外の教科のそれは、さほど、又は全く影響がないからであると思っていたし、それ故これを現在の段階ではある程度やむを得ぬものと思っていたのである。そしてこれを是正するためには入学試験内容の検討が最も必要なことと思っていたが、問題

はそれ程簡単なものでないことがわかったわけである。

芸能、家庭科の指導能率を高めるため生徒の学習意欲を向上させようとするには興味ということ以外には頼るべきものがないように思われる。そのために教材も指導法も評価も、もう一度研究してかゝる必要があることをこの調査は教えてくれたように思うのである。